立命館大学
日本文学会 ニュース No.57
「論究日本文学」第100号 付録 2014.5

【日文研究室だより】

学域制度改革に伴って、日本文学と日本文化情報学の二専攻を擁する日本文学研究学域となって、二〇一四年度で三年目を迎えることとなった。昨年度に引き続いて、新二回生の専攻分属調査が行われ、日本文学専攻七二名、日本文化情報学専攻五六名に分かれることになった。とはいえ、日本文学と日本文化にかかわる両専攻は学ぶべき内容も重なる点が多く、専攻の垣根はそれほど高くない。その一環として二〇一三年度は、旧日本文学講読演習Ⅰ（現在、日本文学作品研究・日本文化情報資源研究）に関して、主専攻の学生の履修希望が優先されるとはいえ、相互の専攻の学生が学べるよう履修制度の手直しを行った。学生には、それぞれの専攻に所属しながらも、幅広い視野で学んでほしい。また、新制度による三回生ゼミの配属にあたり、両専攻のゼミが決まった。日本文学専攻は、古典文学の二ゼミ、近代文学の三ゼミ、日本文化情報学は、図書館情報学ゼミ、日本語ゼミ、古典ゼミ、近代ゼミ、芸術ゼミといった内容である。ゼミの希望者に若干偏りがみられたが、今後も学生にとっていいかたちで学べる状況を作っていきたい。なお、二〇一三年度は、一回生の登録必修科目である「日本文学研究入門講義」を両専攻主任が行ったが、二〇一四年度は、学域の各分野から五人の教員がリレー形式で行うこととなった。こうしたかたちで、学域の学問全体に対する学生の理解を深め、専攻選択にも役立たせていく予定である。また、昨年度の日本文学会には、一回生にも参加してもらった。学内の、午前中だけではあったが、学術的な雰囲気を知ってもらういい機会になったのではないかと思う。

二〇一三年度末で真下厚先生がご退職になった。真下先生は、一九七四年に本学をご卒業、八〇年に大学院博士課程の単位を取得、八八年にご着任になった。上代文学、万葉集や古代歌謡を中心に、言葉と〈声〉との関係を研究なさってきた。ご研究内容は『万葉歌生成論』や『声の神話』などにまとめられている。ご着任以来、専攻の柱となって数々のお仕事をなさってきた。学生の質問等に対し、丁寧に対応、指導なさっている様子が印象に残っている。ご退職後も研究に邁進なさるとのことである。

本年度、藤原享和先生がご着任になった。上代歌謡の研究で『古代宮廷儀礼と歌謡』などのご著書がある。これまで同志社高校にお勤めの傍ら、本学にも非常勤として出講されており、学生にもご理解がある。本学でも、学域、そして国語教育ゼミナールをはじめ本学会に大いに刺激を与えてくださることと思う。

二〇一一年度に彦坂先生、一二年度に中西先生、そして一三年度は真下先生とこれまで専攻を支えて下さった先生がご退職となり、昨年度は、中川先生が研究科長、瀧本先生は京都学専攻の主任、中本先生は一〇年ぶりに内留（後期主任）と、これまで会を支えている中心メンバーがいなくなり、はからずも着任三年目の私が日本文学会会長となることとなった。いろいろと不備があったと思うがご寛恕頂きたい。

（田口道昭）